

琉球方言母音体系の生成過程

— 3 母音化を中心に —

中 本 正 智

1. 本論の目的
2. 方法論的立場
3. 母音体系の生成過程
 3. 1. 母音変化の第1過程
 3. 2. 母音変化の第2過程
4. む す び

1. 本論の目的

本論は現在の琉球諸方言の母音体系がどのような変化を経て生成されたかを、諸方言の実態的資料に基いて考証しようとするものである。とくに、ここでは琉球方言の母音変化の問題で最も顕著な特徴であるいわゆる3母音化(注1)の問題について、その変化のあとを考証することに重点をおく。すなわち、この変化が半広母音の狭母音化という体系上の推移によるものであり、しかもo→uの推移が先に起こり、これと体系的均衡を保ちつつ、ややおくれて e→i の推移が進行していったこと、つまり後舌母音から前舌母音への順に変化が行なわれたことを明らかにしたい。そして、この母音変化の潮流のうちに、琉球諸方言のそれぞれの母音体系の生成の要因をみようとするものである。

さて、琉球方言の母音に関する現在の有力な説として、まず伊波普猷氏の5母音説をあげることができる。これはチェンバレン氏の古代3母音説を批判しつつ、琉球方言はかつては、融合変化になる e・o は別にして、5母音の区別のある方言であり、現在の3母音を基調とする首里方言などのすがたは新しく変化したすがたであることを、諸方言例をあげて論証したものである。(注2)

次に、服部四郎博士は奈良朝の甲・乙類に対応するような音韻上の区別が琉球方言にあることを論ぜられ、琉球方言の母音の問題にさらに重要な側面を加えられた。(注3)これについては、どの程度まで甲・乙類別と関係のある音韻構造が認められるか、諸方言を検討して比較研究を深める必要があり、今後に残された問題は大きい。

以上の説は母音に関して重要な問題を提起していて、その生成の問題についても、その研究方向を示してくれるものである。ここでは先学の成果をふまえ、現在、共時態としての奄美・沖縄・宮古・八重山・与那国諸方言の母音体系がどのような道筋を経て生成されたかを明らかにしたい。

筆者は昭和32年から琉球大学仲宗根政善教授のご指導のもとで沖縄方言と先島方言を主とする調査研究をはじめ、昭和37年からは以前すでに琉球方言の研究をすすめておら

れた平山輝男博士の言語調査に加わってご指導をうけ、最南端の与那国島から最北端の奄美大島に至る琉球諸島の諸方言を臨地調査する機会に恵まれた。その結果は『琉球与那国方言の研究』『琉球方言の総合的研究』『琉球先島方言の総合的研究』（平山博士・大島氏共著）に含まれている。本論ではこれらの資料をふまえて、総体的見地からその後の考察を加えて論述したい。

2. 方法論的立場

まず音韻変化を考察する方法論的立場を明らかにする。音韻は普通いわれるように体系であるから、その変化は音韻相互間にある体系的均衡をになっている要素そのものの変化であるとみることができる。したがって、ある要素の変化は孤立的ではなく、必然的に他の要素へ影響を及ぼす。その影響は他の要素を変化させる場合もあるが、必ずしもすべてがそうではない。体系的均衡を崩すほどの変化でなければ、他の要素の変化をもたらさないであろう。

この観点は、音韻的諸要素の変化は個々別々の変化として峻別すべきでなく、言語内部に宿る同一の体系的つながりのある変化として捉える必要を示している。すなわち、言語の音的側面の総体を一つの変化体とみて、具体的には次の観点から考察することになる。(注4)

①ある母音が変化することによって、音韻体系にどのような変化が起こったか。これには母音要素に及ぼす影響と、子音要素に及ぼす影響の二面がある。

②ある子音が変化することによって、音韻体系にどのような変化が起こったか。これにも子音要素に及ぼす影響と、母音要素に及ぼす影響の二面がある。

このような観点から、ここでは自ら母音を変化の中心に据えて、子音など他の音韻との関係のみることとする。すなわち、母音体系の変化はその言語にとって重大な変貌をきたす要因であって、子音など多くの音韻を変化させる要因となるものと考えられる。そこで母音変化が他の子音などとの連鎖関係で変化してきたことに着目し、方法論的問題としては、逆に子音などの音韻変化の実態を観察し、これに母音変化の影響がどう及んでいるかを洞察することによって、母音の生成過程を解明するてがかりを得ようとするものである。(注5)

以上の観点は言語を体系として捉える場合には当然のものであるが、ここでの琉球諸方言の母音変化の足跡をみる場合も、この観点が基底をなしている。

3. 母音体系の生成過程

琉球方言がどのような変化を経て現在のすがたになったか、総体的に明らかになっていないが、祖語から分岐してどう変化したかについて大きな示唆を与えるものに次のものがある。

まず服部四郎博士は言語年代学的研究によって「京都方言と首里方言とは、今から約1450年ないし1700余年前に分離した」との結果を出された（『言語年代学』即ち「語彙統計学」の方法について——日本祖語の年代——〔言語研究〕26・27号 p. 70）

また、服部博士は祖語についても、「現在のところ、確かなことはわからないけれども、

日本語は、奈良朝よりも少なくとも数百年前に置かなければならない」（「日本語の琉球方言について」〔文学〕36—1, p. 10）と述べておられる。

そして母音体系については、奈良朝日本語の甲・乙類別に由来する区別を奄美の加計呂麻島諸鈍・名瀬方言に見出されたため、分岐後の琉球方言のすがたは、問題を含みつつも、より具体性をもつようになったといえよう。(注6)

そして最近、外間守善教授は服部博士の説を敷衍しつつ、分岐後の琉球方言のすがたを文献から考証しておられる。これによると、「六世紀頃、南の島々に定着した言語が、どのような変化をしていったかということは、十五世紀頃になるまで文献資料が皆無のためうかがい知るすべがなく、言語史的には六世紀から十五世紀までほとんど空白時代ということになってしまう」（『沖縄の言語史』〔文学〕p. 18）と文献による研究の困難性を指摘されつつも、歴史学的研究成果等を援用して、琉球方言においては12世紀頃から方言化への傾斜を推測され、また文献化された言語の分析結果により、「十二世紀頃から十五世紀頃にかけての音韻・語法・語彙の諸要素の変化がしだいに著しくなっていたであろう」（〔文学〕p. 18）としておられる。

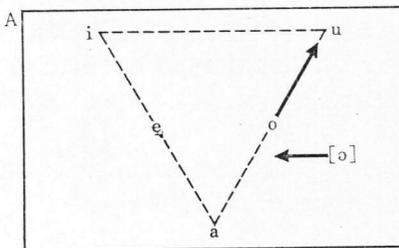
外間教授は母音変化についても、これまでの諸説を検討され、「琉球方言では五母音から三母音に変化した」（〔文学〕p. 21）という考え方を前提にされ、その変化の様子を次のように考証される。

すなわち、『おもろさうし』『琉球館訳語』『語音翻訳』『陳侃使録』等の資料から、「方言化への傾斜を始めた十二世紀頃から母音変化の様相を胚胎していたかどうか、あかしの立てようがないが、私は、文献時代（十五世紀末以後）に入る直前頃にはかなりの程度まで三母音化現象が進んでいたに違いないと考えている」（〔文学〕p. 21）とされた。(注7)

筆者はこれら先学の成果を土台にして、とくに外間教授のいわれる「五母音から三母音に変わった時代」における母音変化の様相を実態的方言資料の比較をもとに明らかにし、現在に至る琉球諸方言の母音体系の生成過程の一端を明らかにしたい。服部博士のいわれる甲・乙類別の問題は今後に残される。

このような立場にたって、以下、3母音化の胎動期から現在までを二つの過程に分けて考察することにする。

- 3. 1. 母音変化の第1過程** まず、琉球方言の3母音化への第1変化過程として、次のようにoがuへ推移する傾向が起こったと考えられる。(注8)
(象徴的に母音三角形で示す)。



すなわち、琉球方言のいわゆる3母音化の初期の変化として、まず、oがuの方向へ推移していったと考えられる。したがって、o→uの推移が、e→iの推移より先に起こったとみるわけである。

この変化の胎動期は琉球方言が奄美沖繩と先島の両方言に分岐する直前で

あったと考えられる(注⁹)から、3母音化への傾向は文献時代を遡るかなりはやい時期にあったのではなからうか。このことは、先の外間教授の「文献時代直前にはかなりの程度まで三母音化が進んでいた」とのご推定をうらづけるものである。

この3母音化への変化が円滑に実現される状況を醸成したのは、連母音の融合によって [o] が発生して o の周辺に音声上の類似母音が増加したことにあると考えられる。(注¹⁰)

以上の第1過程を考える理由として、o→u の推移が琉球方言全体に起こっている実態をあげることができる。これは体系的に同一の力、すなわち、o→u の変化傾向としての動きが、琉球方言の分岐直前の時期に同時にはたらいっていたことを想わせる。

奄美から与那国まで o→u の実態を代表方言で示せば次の通りである。

奄美大島方言 [ʔutuɡi] (おとがい) [wʉɡɡwa] (斧) [kui] (声) [kumi] (米) [sudati] (育てる) [turi] (鳥) [tʉɡjun] (研ぐ) [turjun] (取る) [nudi] (喉) [numjun] (飲む) [Fuʃi] (星) [mutʃi] (持つ) [haku] (箱) [kumu] (雲)

沖縄糸満方言 [ʔuki:n] (起きる) [ʔu:n] (斧) [kumi] (米) [sun] (損) [tui] (鳥) [numi] (蚤) [Funi] (骨) [mutun] (持つ) [juru] (夜) [haku] (箱) [kumu] (雲)

宮古大浦方言 [utuɡui] (おとがい) [kui] (声) [sui] (剃る) [sun] (損) [tuʃi] (鳥) [duru] (泥) [nun] (蚤) [nun] (飲む) [puni] (骨) [pʉsi] (星) [mutsi] (持つ) [juʃi] (夜) [paku] (箱) [kimu] (肝)

八重山西表島祖納方言 [utu] (音) [un] (鬼) [kui] (声) [sudi] (袖) [sun] (損) [tubu] (飛ぶ) [duru] (泥) [nun] (蚤) [numu] (飲む) [pʉpi] (骨) [pʉʃi] (星) [mutsu] (持つ) [juru] (夜) [paku] (箱) [Fuʃu] (雲)

与那国祖納方言 [ugirun] (起きる) [kui] (声) [suba] (側) [turun] (取る) [duru] (泥) [nun] (蚤) [Funi] (骨) [mutun] (持つ) [duru] (夜) [hagu] (箱) [mmu] (雲)

このように、現代共通語のオ段母音にあたるものは、多くの語で全球的に u であるが、語によって、また方言によって、o があらわれるものがある。これは奄美方言のうちでも奄美大島・加計呂麻島・与路島等に多くみられるので、その一例を対照して示せば p. 6・7 の次表の通りである。なお、表中の「恐い・夫・弟・居る・飲む」などのように諸方言で u に変化しているものも多い(表中の「音・思ふ・雲・九・心・股」などは『日本語の系統』p. 58 以下で、乙類の例としての比較がある。)

琉球方言の o→u という音韻変化が円滑におこなわれるための状況を醸成したのは融合母音の発生であろう。これは琉球諸方言でかなりの勢力をもって行なわれている。たとえば沖縄方言(奥武)では、[to:ri:n] (倒れる) [mo:i:n] (舞う) [ʔo:dʒun] (扇ぐ) [no:i:n] (直る) [ʔo:han] (青い)……などである。また一方、漢字音に由来する [bo:dʒi] (坊主) [so:gatʃi] (正月) [bo:] (棒) などみられる。これらの長音は [o:] などを経たものであろう。3母音化と融合母音との関係はこのように密接なものとする。今後一層の調査研究によって明確になるであろう。

次に、母音の o→u の変化によって子音がどのような影響を受けたかについて考察する。この子音の変化を母音との連鎖関係でとらえることによって、母音の o→u の変化をより明確にうらづけることができよう。

カ行子音は $o \rightarrow u$ の変化に応じて全琉球方言で影響を受けている。すなわち語頭でウ段が無気喉頭化音の [k'] に変化する奄美沖繩方言と、摩擦音の [f] または [h] に変化する先島方言とに分かれる。この変化は音声的に異質ではあるが、 o が u に推移することに由来して起こった体系的に同一の力によってもたらされたものと考えられる。すなわち、オ段とウ段との拍は母音同士が近接して統合する方向へ変化するために、逆に子音同士は統合を避けようとして離反する力が生じ、この力によって、ウ段子音は奄美沖繩方言では無気喉頭化音の [k'] に、先島方言では摩擦音の [f] に変化していったと考えられる。このような [k'] と [f] の相違はカ行子音が実際に変化したのが奄美沖繩と先島の両方言の分岐直後であったことを想わせる。

こうして、 $o \rightarrow u$ の推移の結果起こった琉球諸方言のカ行子音の変化をみわたすと、次の通りである。まず奄美名瀬方言ではウ段が [k'ugi] (釘) [k'ubi] (首) のように無気喉頭化音に変化してオ段の [kufi] (腰・背中) [kuri] (これ) などと区別を保っている。また [k'] と [k] との間にある離反する力によってオ段の [k] が [F] に変化していった方言もある。たとえば沖繩名護方言ではウ段の [k'ugi] (釘) [k'ui] (首) に対してオ段は [Fufi] (腰・背中) [Fumi:] (米) である。(なお、オ段子音が [F] に変化しているこれらの方言においては広母音のア段子音も [hagi] (影) [ha:mi:] (亀) [hami:] (神) [hami] (瓶) のようにこれと並行しているのが多い)。

$o \rightarrow u$ によっていったん無気喉頭化音になったウ段の [k'] も、時がたつにつれて喉頭化がうすれる傾向にあり、すでにこれを失ったものもある。つまり、ウ段とオ段を [k'] と [k] で区別するようになった方言も、喉頭化がうすれ、ついに、これを失ったために [k] に統合して区別を失ってしまったのである。たとえば沖繩中・南部の多くの方言では [kudz̥i] (釘) [kufi] (腰・背中) (玉城村奥武方言) のように [k] に統合してしまっている。

宮古諸方言ではウ段が [f] に変化したためにオ段の [k] と区別を保っている。たとえば大浦方言ではウ段の [fug̥i] (釘) [fusu̥i] (薬) に対してオ段は [kui] (声) [kug̥i] (漕ぐ) である。

八重山方言での変化は宮古諸方言の変化と同類のものであるが、ほとんどの方言で [f] が弱まって [F] に変化したすがたである。たとえば西表島租納方言ではウ段が [Fui] (釘) [Fusa] (草)、オ段が [kufi] (腰・背中) [kuf̥i] (これ) のように区別がある。

与那国方言ではウ段が [mmu] (雲) [t'za:] (草) [t'i] (口) のように融合脱落している。これはオ段の [kui] (声) [kut̥fi] (腰・背中) [kutuba] (言葉) などと区別がある。これらウ段の頭音は、かつては八重山方言のように [F] を経て第2拍に同化されたものであろう。ただし、[kugi] (釘) [kut̥fi] (櫛) のように変化しない例もある。

以上のように、カ行子音だけをみても、母音の変化に伴って、子音がかなり複雑な変化をうけている。この一例からみても、全国の諸方言のうち、とくに琉球方言では母音変化に伴う子音変化が大きかったことをみることができよう。この $o \rightarrow u$ の時期を界にして、母音変化に大推移をきたし、これに伴う音韻変化が進行することになり、これが本土の諸方言と異なる琉球方言の音韻的特色をもたらす重要な原因になったと考えられる。

方言		赤木名	竜郷	名瀬	小湊
語例					
1. 急	ぐ	ʔifogari	ʔifogjun	ʔisogī	ʔisogorun
2. 糸		ʔitu	nuiso	ʔitu	ʔito
3. 拝	む	wugamjun	ʔugamjun	wugami	wugamun
4. 置	く	ʔukjun	ʔukjun	ʔuki	ʔukun
5. 押	す	ʔusejaraʃun オシヤル	ʔuʃun	ʔuʃi	ʔusun
6. 恐	しい		ʔuturuʃa	ʔuturuʃa	ʔuturusa
7. 夫		wutu	wutu	wutu	wutu
8. 音		ʔutu	ʔutu	ʔutu	ʔutu
9. 弟			ʔututu	ʔututu	ʔututu
10. 踊	る	wudurjun	wudurjun	wuduri	woderun
11. 思	う	ʔomojun	ʔomojun	ʔomojun	ʔomorun
12. 親		ʔuja	ʔuja	ʔuja	ʔuja
13. 織	る	ʔurjun	ʔurjun	ʔuri	ʔurun
14. 居	る	wun	wun	wun	wun
15. 女		wunaʒu	wunaʒu	wonaʒu	wunaʒu
16. 雲		k'umo	k'umo	k'umo	k'umo
17. 九		konotsi	konotsi	konotʃi	kunutʃi
18. 心		ko:ro	koro	ko:ro	ko:ro
19. 琴		koto	koto	koto	koto
20. 言	葉	jumuta	jumuta	jumuta	jomota
21. 裾		suso	susu		susu
22. 蛸		taFu	toho		to:
23. 角		t'zino	t'zino	t'zino	t'zino
24. 壺		t'zibu	t'zibo	t'zibu	
25. 残	る	no:rjun	nokorjun	no:ri	no:run
26. 飲	む	numjun	numjun	numi	numun
27. 乗	る	no:rjun	norjun	no:ri	norun
28. 臍		Fusu	Fusu	Fusu	Fusu
29. 星		Fuʃi	Fuʃi	Fuʃi	Fuʃi
30. 戻	る	modorjun		mudurjun	modorun
31. 婿		moho	moho	muFu	
32. 藻		mo:	mo:	mu	
33. 股		momo	momo	momo	

根 瀬 部	恩 勝	湯 湾	屋 鈍	押 角	与 路
	ʔisogʊm	ʔisogʝui	ʔifogati ^{~テ}	ʔifogajum	ʔisogʝur
ʔito	ʔito	ʔito	ʔito	ʔito	ʔito
	ogami	wugamʝui		wugamʝum	ʔogajum
ʔukuri	ʔukʊm	ʔukʝui	ʔukʝur	ʔukʝum	ʔokʝom
ʔufʊm	ʔusʊm	ʔufʝui	ʔufʝur	ʔusajum	ʔosajum
ʔuturuʝa	ʔuturuʝa	ʔutuʝa:		ʔuturuʝa:	ʔutʊʝʝa
wutu	wutu	wutu	wutu	wutu:	wutu
ʔutu	ʔutu	ʔutu	ʔutu	ʔutu:	ʔoto
ʔututu	ʔututu	ʔututu:	ʔututu	ʔututu	ʔututu
wudiri	wudurʊm	wudʝui	wudurur	wudʝum	judʝum
	ʔomʊm	ʔumʝui	ʔumʝur	ʔumʝum	ʔo:ti ^{~テ}
ʔuja	ʔoja	ʔuja:	ʔuja:	ʔuja	ʔoja
ʔuri	ʔurʊm	ʔuʝui	ʔurur	ʔurʝum	ʔoru
wuri	wʊm	wʊm	wur	wum	wum
wunaʝu	wonaʝu	wunaʝu:	wunak	juna:k	wonak
k'umo	k'umo	k'umo	k'umo	k'umo:	k'umo
kuFunutʝi	kuFunutʝi	ku:nutʝi	ko:not	kuhonoti	k'onot
kohoro	koxoro	ku:ru	ko:ro	kohoro	k'o:ro
koto	koto	koto	koto	koto	koto
	kutuba	kʊtuba:	jumëta	kʊtuba	kʊtuba
suso	susu	susu	susu	siso:	suso
toho	toho	tu:	to:	toho	to:
t'zino	t'zino	t'zunu:	t'ino	t'ino	t'zuno
t'zibu	t'zibu	t'zubu	t'ibu	t'ibu	t'ubu
no:ri	nohorʊm	no:ʝui	no:rur	nohoʝum	nogoʝum
numi	numʊm	numʝui	numʝur	numʝum	nʊʝum
nuri	nurʊm	nʊʝui	nurur	nurʝum	norʝum
Fufu	Fusu	Fusu	Fusu	Fusu:	hoso
Fufi	Fufi	hoʝi	Fuʝ	Fu:ʝ	Fuʝi
	mudurʊm	mudʝui	mudorur	mudʝum	modʝum
muFu	muFu	muho:	muho	moho	mo:
mu:	mu:	mu:		mo:	mo:
momo	momo	mumu	mumu	mumo	momo

この観点から、カ行子音については拙論「k音考」(『方言研究の問題点』)で全琉のみわたしたたって詳論した。以下、他の子音についても一つ一つ同様な検討を加えて母音との影響関係を考察する必要があるが、諸子音に関し、それぞれ全琉的用例をあげることは紙面のつごうでできないので、以下では代表事象だけについて記すことにする。(注¹¹)なお、それぞれの子音に関しては別稿に詳論の予定である。

ハ行子音(注¹²)はカ行子音と類似の変化をしている。とくに、p音をとどめる方言ではカ行子音と同様に o→u の影響が顕著である。これは同じく破裂音という音声上の類似によるものであろう。

すなわち、ハ行子音の変化の足跡をたどれば、奄美沖繩方言ではイ段とウ段で無気喉頭化音 [p'] に変化し、エ段とオ段の [p] と対立する結果になる。この [p'] と [p] は無気喉頭化を失って統合する場合もあるが、相互に均衡関係を保ちつつ、[p] が [p]→[ç] (エ段)、[p]→[f] (オ段) のように変化し、これに応じて、[p'] は無気喉頭化を失って [p']→[p]→[f]→[ç] (イ段)、[p']→[p]→[f] (ウ段) のように変化していったと考えられる。したがって方言によってはイ・ウ段においてだけ p 音をとどめる場合がある。なお、ア段はエ・オ段と行をともし、[p]→[f]→[h] のように変化していった。

一方、先島方言では、奄美沖繩方言と異なり、ウ段子音が [f] に変化してオ段子音の [p] と対立し、カ行ウ段子音と統合する結果になった。

以上の変化を諸方言で例示すると、まず、沖繩名護方言ではイ・ウ段が [p'i:] (火・日) [p'iu] (干る) [p'uni] (船) [p'uju] (冬) [p'ukkui] (袋) のように無気喉頭化音に変化して、エ・オ段の [pi:] (屁) [pira] (へら) [pu:] (帆) [puji:] (星) [puni] (骨) と区別される。ア段は [pana:] (鼻・花) [pani] (羽) などのように、エ・オ段と同じである。

奄美と論島麦屋(東区)方言などでは無気喉頭化が失われたために、すべての段が [pa:] (橋) [pada:] (裸) [pidzai] (左) [puta] (蓋) [pi:] (屁) [puji] (星) のように統合したものと考えられる。

沖繩北部の喜如嘉方言ではイ段が [p'i:] (火) [p'ikka] (暇) [p'ittsai] (額) [p'isa] (足) のように、無気喉頭化音をとどめ、他の段では [fana] (鼻・花) [fa:] (葉) [fe:] (灰) [fo:ki] (筥) のように両唇摩擦音に変化してしまっただ。さらに、沖繩中部谷茶方言ではイ段も [f] に変化し、[fana] (鼻) [fata] (旗) [fidzi] (髻) [firu] (屋) [funi] (船) [fi:] (屁) [funi] (骨) のようにすべての段で両唇摩擦音に統合している。谷茶集落以南の沖繩中・南部方言では、これからさらに変化したすがたである。たとえば、沖繩南部玉城村奥武方言では [hana] (鼻) [çidzi] (髻) [funi] (船) [çi:] (屁) [funi] (骨) である。

先島方言のうち、宮古大浦方言ではウ段とオ段は [fu:] (櫛) [funi] (船) [fuju] (冬) [fuki] (吹く) [fu:] (降る); [pu:] (星) [puni] (骨) [pu:] (掘る) のように対立している。他の段では [pana] (鼻) [pida:] (左) [pi:] (屁) のようにオ段と同じである。

八重山方言では宮古方言の [f] が弱まったすがたを示し、[F] に変化している。たとえば西表島租納方言では [Fukuru] (袋) [Fu:] (船) [Fu:] (冬) [Fu:] (降る) [Fuku] (吹く); [pu:] (星) [pu:] (骨) [pu:] (帆) [pu:] (掘る) のようにウ段とオ段が対立

し、他の段は [pana] (鼻) [pidari] (左) [pi:] (屁) のようにオ段と同じである。

与那国方言のハ行子音はウ段とオ段が [t'a:] (蓋) [t'a:tfi] (二つ) [k'an] (深い) [k'uru] (袋) [k'uŋ] (吹く) [nni] (船); [Fu:] (帆) [Funi] (骨) [Furuŋ] (掘る) のように区別される。これらウ段の頭音は、かつては [F] を経たであろうが、オ段と区別を保つために融合脱落したのでであろう。他の段では [hanaburu] (鼻) [çiri] (昼食) [çi'ra] (へら) である。

次に、琉球諸方言のタ行音のウ段とオ段は o→u の推移に応じて、それぞれの方言でウ段が [t'u·t'i·tsi·si·tfi] のように変化したために、オ段の [tu] と区別を保っている。これはサ行音でも同様で、ウ段の [si·si·fi] と、オ段の [su] と区別を保っている。濁音においても、[midži] (水); [ʔadu] (踵), [kidži] (傷); [kudzju] (昨年・こそ) (沖縄奥武方言) のように、ウ段とオ段とは区別される。

すなわち、前口蓋に調音点のある子音 ([t·d·ts·s·z]) の直後では、o→u の変化に応じて、本来の u の母音が、u→i→i の変化をたどることになり、オ段母音との統合から免れている。(注13)

これらを諸方言で例示すれば、タ行音は奄美の喜界島塩道方言では [t'utʃi] (月) [t'una] (綱) [t'unu] (角) [t'umi] (爪); [tui] (鳥) [tuʃi] (年) [tubjuŋ] (飛ぶ) [tujjuŋ] (取る)、奄美大島久志方言では [t'ina] (綱) [t'inu] (角) [t'im] (爪); [tuʃi] (年) [turi] (鳥) [turjuŋ] (取る)、宮古多良間島仲筋方言では [tsidzim] (鼓) [tsibu] (壺) [tsimi] (爪); [tul] (鳥) [tusi] (年) [tubi] (飛ぶ)、沖縄伊江島方言では [sinu:] (角) [simi] (爪) [sitʃi:] (月); [tui] (鳥) [tu:sa] (遠さ) [tujjuŋ] (取る)、沖縄南部玉城村奥武方言では [tʃina] (綱) [tʃiŋ] (角) [tʃimi] (爪); [tui] (鳥) [tuʃi] (年) [tuin] (取る) のように区別される。

サ行音は奄美大島の久志方言では [si:] (巢・酢) [si:] (吸う) [si:si] (煤) [sina] (砂) [sitiri] (捨てる); [sudi] (袖) [suba] (側) [sun] (損)、宮古大浦方言では [ssi] (巢), [si:] (酢) [sidzi] (筋) [sʃsi] (煤) [sitiru] (捨てる); [sudi] (袖) [sun] (損) [sui] (剃る) [sumi] (染める)、沖縄伊江島方言では [sina] (砂) [si:] (巢) [sitsi:] (好き) [sidaʃa] (涼しさ), [sutu:] (外) [suba:] (側)、沖縄南部奥武方言では [ʃi:] (巢・酢) [ʃiʃi] (煤) [ʃina] (砂) [ʃitʃi:ŋ] (捨てる); [sudi] (袖) [sun] (損) [suin] (剃る) のように区別される。ただし、u が変化しないためにウ段とオ段が統合している方言もある。たとえば奄美与路島方言では [su:] (巢・酢) [sudži] (筋) [susu] (煤) [sudamjuŋ] (涼む) [sutijjuŋ] (捨てる); [sudi] (袖) [suirjuŋ] (添える) [surjuŋ] (剃る) のように統合している。

以上のウ段における u→i→i の傾向は濁音においても全統的にみられる。

	奄美久志	喜界塩道	沖縄奥武	伊江島	宮古大浦	仲筋	八重山黒島
水	[midi]	midu	midži	midzi	midzi	midzi	midži
傷	[k'idi]	tʃidu	kidži	kidzi	kidzi	kidzi	kidži

琉球方言の母音変化の第2過程として次のように e が i の方向に推移する変化が起こったと考えられる。

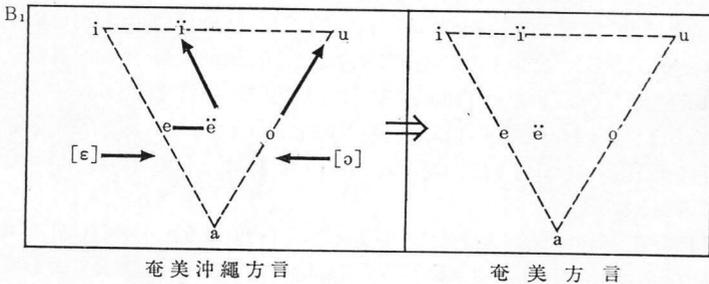
3. 2. 母音変化の第2過程

すなわち、琉球方言全体で後舌母音の $o \rightarrow u$ の変化につれて、ややおくれて前舌母音にも同質の半広母音の狭母音化という変化が起こり、その結果、 e が i の方向に推移するようになった。ところが、推移するときの母音の変化軌跡は、奄美沖繩方言と先島方言とは異なっていたと考えられる。これは奄美の多くの方言で e が i に変化し、イ段の i と区別を保っているのに対して、宮古の多くの方言では e が i に変化し、本来の i は摩擦的雑音を伴う中舌母音の i に変化して区別を保っていることからうかがわれる。(注14) なお、これらの区別のない沖繩・沖永良部・与論諸方言や先島の鳩間・与那国島の方言などは、前者が奄美方言、後者が宮古方言と同類の体系から、それぞれ中舌母音の i や i を失って、ついに i に統合することによって派生したものである。

この奄美沖繩方言と先島方言における e の推移のちがいは、両方言がこの変化時期に、すでに分岐していたであろうことを推察させるものである。

また e が i の方向へ推移する変化に拍車をかけたのは、 $o \rightarrow u$ の場合と同様に融合母音の発生によって、 e の周辺に、音声上の類似母音が増加したためであろう(注15) (母音三角形では $[\epsilon]$ で示した)。

以上のような母音の変化を諸方言によって例示すれば次の通りである。



B_1 は奄美方言のうち、奄美大島・徳之島の諸方言など中舌母音をもつ方言における変化である。たとえば奄美大島恩勝方言ではイ段とエ段は次のように区別される。

[ʔiki] (息) [ʔiʃi] (石) [ni:] (荷) [ʃidʒi] (肘) [k'inu] (昨日) [ʃima] (島)
 [ʃiru] (汁) [ʔadʒi] (味) [ʔami] (網) [nami] (波) [Fuʃi] (星) [k'ubi] (首)
 [saki] (先) [turi] (鳥) [hari] (針) [wui] (甥)……

[ti:] (手) [ʔi:] (尻) [tirun] (照る) [niburun] (寝る) [migurun] (めぐる)
 [ʔudi] (腕) [tatirun] (建てる) [ʔukirun] (受ける) [nabi] (鍋) [kani] (鐘) [hani] (羽)
 [Funi] (骨) [ʔami] (雨) [kami] (亀・瓶) [kumi] (米) [mami] (豆)……

このようにイ段とエ段は i と i で区別されるものが多いが、エ段の中には e にとどまっている例もある。

[sëxë] (酒) [sëxërun] (裂ける) [dëxë] (竹) [mëxërun] (負ける) [wëxërun] (分ける)

これらは k が軟口蓋奥の摩擦音に変化してついに脱落し、母音が融合して長音化する現象に左右されたための変化で、これらの例は変化中途のすがたであろう。事実、名瀬方言

などでは [së:](酒) になっている。

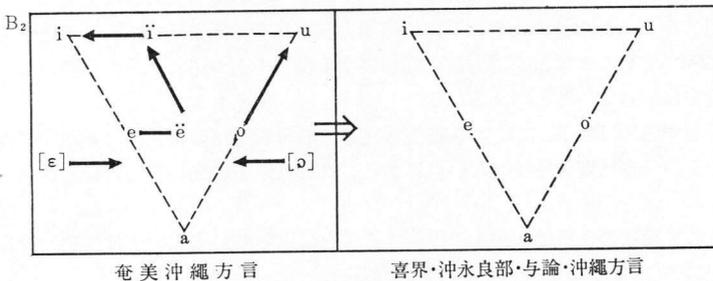
なお、エ段で [ʔerabun](選ぶ) [jeri](襟) [kabe](壁) (注10) などのように e があられる語例もある。

以上のようにエ段は主流として e→i の変化を経たと考えられるが、音的環境や語彙的なちがいによって、ë・e もあられている。

また、この方言の e の周辺の融合母音例としては、次のように è である。

[dë:](代金) [së:ku](細工) [të:gë:](大概) [të:ko](太鼓) [dë:dzi](大事)
 [të:Fu:](台風) [nën](無い) [Fë:](灰・蠅) [Fë:ji](囃) [Fëssan](早い) [jassë]
 (野菜) [ʔiFë](位牌)

次に、エ段に出自をもつ i が i に統合することによってイ段とエ段の区別を失った方言が生成されたと考えられる。



奄美沖繩方言

喜界・沖永良部・与論・沖繩方言

B₂ は奄美方言傘下の喜界島・沖永良部島・与論島の多くの方言、沖繩諸方言にみられる。たとえば、沖永良部島和泊町瀬名方言では、イ段とエ段が次のように統合している。

[ʔi:](胃) [ʔi:ji:](石) [ʔitʃi:](息) [çidʒi:](肘) [ʔuni:](鬼) [habi:](紙)
 [kʏʃi:](櫛) [ʃima:](島) [tabi:](旅) [tʔʒi:](乳) [tui](鳥) [na:mi:](波)
 [ni:](荷) [çi:](火) [Fuʃi:](星) [ʔubi](帯)……

[mi:](目) [çi:](毛) [çi:](屁) [hami:](亀) [hami](瓶) [sudi:](袖) [hani:]
 (鐘) [hadʒi:](風) [ti:](手) [tijun](照る) [nabi](鍋) [Funi](骨) [ma:mi:]
 (豆)……

また、この方言の e 周辺の融合母音は次のように e(:) になっている。

[he:jun](変える) [de:kuni](大根) [ne:](地震) [çidʒe:](左) [çe:](灰・蠅)
 [çe:san](早い) [ko:keʃun](後悔する) [ʔiçe](位牌)……

この方言の母音体系は、融合母音を除けば、中舌母音を失って、a i u の3母音を基調とするすがたになっている。

これらの方言の母音体系がかつては中舌母音をもっていたであろうことは、これらの近隣に中舌母音をかすかにとどめる方言が存在することによって明らかである。

たとえば、沖永良部島のほとんどの方言が上記の瀬名方言のような母音体系であるが、北端の国頭方言だけはかすかに中舌母音の痕跡がみられる。すなわち、「荷」「恥」の [ni:] [Fadʒi:] と、「根」「風」の [ni:] [hadʒi] と区別がある。この [ɿ] はかつては中

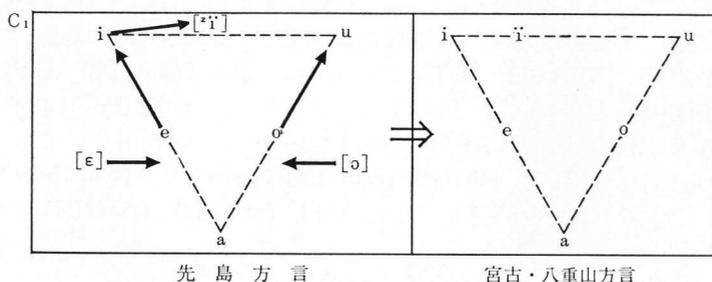
舌母音の i であったと考えられる。奄美北部の中舌母音の勢力がある赤木名方言などにおいては、現在もなお「根」「風」は [ni:] [kadzi] である。このように国頭方言でも、かつては明瞭であったであろうが、いまではイ段とエ段の母音が統合寸前にある。すでに「実」と「目」の語例では共に [mi:] に統合している。

喜界島方言になると中舌母音の推移がもっと明確になる。すなわち、北部の塩道・小野津・志戸桶方言では「海」の [ʔumi] と、「雨」の [ʔami] のように区別があるが、中・南部の花良治・阿伝・湾方言では共に [ʔumi] [ʔami] で中舌母音を失っている。そして北部の方言のように区別のある方言においても、青・少年層ではすでに中舌母音を失っている場合がある。(注17)

このように中舌母音は奄美大島・徳之島方言では優勢であるが、次第に衰微する傾向にあり、沖永良部島・喜界島においてはすでにこれを失った方言が多いが、辺境の地には中舌母音を残している方言が観察され、与論島ではすべての方言でこれを失っている。これら中舌母音を失った方言の母音体系は沖縄諸方言の母音体系と同類であることから、沖縄諸方言においてもかつては奄美方言と同類の中舌母音をもつ母音体系があり、これから変化して現在に至っていると考えられる。

以上、要するに B₁, B₂ に属する奄美沖縄方言の母音変化の特色は、e が i に推移しても本来の i の母音は変化を受けない点にある。これは以下の先島方言の母音変化と対比される。

先島方言では次のように e が i に推移することによって、本来の i は摩擦的雑音を伴う中舌母音の ^hi へ変化していったと考えられる。



C₁ は宮古・八重山方言の中舌母音をもつ方言である。たとえば宮古大浦方言ではイ段とエ段は次のように区別される。

[ik^hi] (息) [adzi] (味) [kab^hi] (紙) [k^hik^hi] (聞く) [k^himu] (肝) [tsik^hi] (月)
 [fusi] (櫛) [futsi] (口) [sin] (死ぬ) [tab^hi] (旅) [tsikafu] (近く) [p^hitu] (人)
 [p^higi] (髯)……

[afi] (汗) [kui] (声) [dʒin] (膳) [taki] (竹) [nabi] (鍋) [ni:] (根) [pi:] (屁)
 [mai] (前) [mami] (豆) [mi:] (目) [u:ki] (桶)……

大浦方言では [pe:beti] (早々と) [mme:tʃi] (いらっしやい、語幹は沖縄方言の [ʔime:n] 一イ参ルに対応) などのように融合母音もあらわれるが、比較的少ない。

宮古方言は大浦方言のように先島方言のうちでは中舌母音を根強くとどめる方言であるが、池間などではすでに衰微して、[ts, dz, s]などの前口蓋音のあとだけに中舌母音をとどめ、他では*i*に変化している。すなわち、[itsi] (息) [tsi:] (乳) [dzi:] (地) [adzi] (味) [isi] (石) [usi] (牛) などに対して、[çitu] (人, 老年層 [pitu]) [çigi] (髻) [kabi:] (紙) などである。

八重山方言においては小浜島・石垣島・波照間島方言のように中舌母音がみられる。たとえば、小浜島方言ではイ段とエ段が次のように区別される。

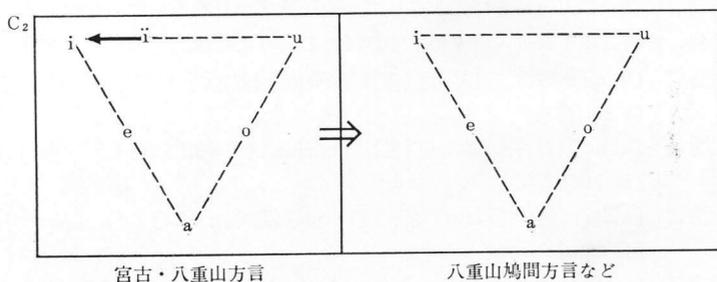
[iki] (息) [usi] (牛) [kaçi] (紙) [kimu] (肝) [sima] (島) [tsikara] (力)
[pi:] (火) [pitu] (人)……

[a:fi] (汗) [ami] (雨) [i:] (胃) [kami] (亀) [ki:] (毛) [kui] (声) [ti:] (手) [mi:] (目)……

小浜方言では融合母音が [ipe:] (位牌) [pe:run] (入る) [de:ntsi] (大事・大変だ) [ne:nu] (無い) [me:ku] (宮古) のようにあらわれる。

八重山方言のうち、竹富島・黒島方言などでは中舌母音が衰微している。たとえば、竹富島方言では中舌母音はウ段の [matsi] (松) [natsi] (夏) [kidzi] (傷) などにわずかに残り、他では [pi:] (火) [fi] (着物) [ifi] (石) [ufi] (牛) [Fytfi] (口) [adzi] (味) のように、*i* である。

このように先島方言では中舌母音が行なわれているが、全般的には中舌母音が衰微する傾向にあり、八重山方言の中には鳩間島・西表島租納方言のように、すでに中舌母音を失い、イ段とエ段が統合して、3母音を基調とする母音体系になっている方言がみられる。これらの方言は次のように変化したと考えられる。



すなわち、中舌母音の *i* はイ段から変化したものであったが、次第に中舌母音が弱まって *i* になることにより、*e* から推移した *i* と統合することになる。たとえば、八重山鳩間方言(注18)では次のようにイ段とエ段が統合している。

[mitfi] (道) [fima] (島) [iki] (息) [pi:] (火) [kabi] (紙) [ifi] (石) [pidzi] (肘) [fiki] (月) [tabi] (旅)……

[puni] (骨) [funi] (船) [ami] (雨) [afi] (汗) [pi:] (屁) [mi:] (目) [ti:] (手) [kui] (声)……

鳩間方言の融合母音は [pe:run] (入る) [de:dzi] (大事・大変だ) などのようにあらわ

れる。

与那国方言は a i u の3母音体系の方言であるが、これは八重山方言と同類の体系から中舌母音を失うことによって生成されたものと考えられる。すなわち、イ段とエ段の母音は次のように統合している。

[kidi](傷) [tʰʒi:](火・血) [tʰʒima](島) [miŋ](水) [di:](地) [nirun](煮る)……

[ki:](毛) [ti:](手) [ʃiban](狭い) [diŋ](銭) [çira](へら) [mi:](目) [ni:](根) [kudi](釘)……

与那国方言では融合母音の e は i に変化したとみられる。たとえば、[minun] (無い) は、小浜・石垣・波照間方言の [ne:nu] に対応するものであり、助詞の「～へ」にあたる -kai は、-ke: を経て [kumaŋki] (こちらへ) [kamaŋki] (あちらへ) のようになる。

以上、先島方言の前舌母音の変化をみてきたが、その特色は e が i に推移することによって、本来の i が中舌母音の ɨ などに変化していった点にある。この変化は先の奄美沖縄方言と対比される。

このように琉球方言の前舌母音における e→i の推移の仕方は、奄美沖縄方言と先島方言の間に隔たりがあり、それぞれの方言で出自を異にする中舌母音は全般的に衰微の傾向にあって、方言ごとの事情に応じて i に合流していく過程にある。したがって現在の琉球方言のすがたを観察するとき、e→i の推移過程は方言ごとに様々な段階にあって、先にみた後舌母音における o→u の推移がほぼ全琉的に同一の変化をたどっていることは異なるものである。

次に子音の変化について考えると、e→i の推移過程が方言ごとに異なるために、この影響による子音の変化は方言ごとに差があって、全琉的の広がりをもっていない。

たとえば、カ行音のイ段とエ段を例示すれば次のようになる。

奄美名瀬方言 [kʰinu] (昨日) [kʰiri] (霧) [kʰirun] (着る); [ki] (毛) [kibuʃi] (煙) [kiri] (蹴る)

奄美佐仁方言 [kʰinu] (昨日) [kʰiri] (霧) [kʰirjun] (着る); [xi] (毛) [xibuʃi] (煙) [xirjun] (蹴る)

与論麦屋方言 [kidʒi] (傷) [kimu] (肝) [kikjui] (聞く); [ʃi:] (毛) [ʃimbuʃi] (煙) [ʃi:taɟujui] (蹴る)

沖縄奥武方言 [tʃinu:] (昨日) [tʃimu] (肝) [tʃi:ŋ] (着る); [ki:] (毛) [kibuʃi] (煙) [ki:ŋ] (蹴る)

八重山波照間方言 [sʃju] (昨日) [sʃnu] (着物) [sʃkum] (聞く); [ki:] (毛) [kiɸusi] (煙)

すなわち、イ段では [kʰ, k, tʃ, s] などの変化を経、エ段では [k, x, s] の変化を経ている。これらは e→i の推移によってもたらされたイ段とエ段間の緊張による変化と考えられる。この変化は分布にまとまりがなく、方言ごとの事情に応じて変化していったものと考えられる。(注19)

琉球方言ではこのほかにイ段とエ段を様々なすがたで区別しているものがみられる。

たとえば、奄美瀬戸内町方言では語中・語尾の破裂音直後の i は脱落する傾向がある。

[ʔakje](商) [ʔakdʒaʃum](吐き出す) [tak](滝) [sak](先) [k'up](首) [ʔusak]
(兎) [k'ir](霧)……

これらはエ段の [ʔukijum](受ける) [kaki](賭) [ʔagijum](上げる) [nabi](鍋)
[karirjum](枯れる) などと区別がある。

また、宮古方言における成節的なmはほとんど語尾のイ段音でみられる。たとえば平良方言では次の通りである。(注²⁰)

[mim](耳) [pasam](缺) [kagam](鏡) [am](網) [kam](神)……

これらはエ段の [tsimi](爪) [mami](豆) [jumi](嫁) と区別される。

琉球方言におけるイ段音とエ段音とは統合している場合も多いが、上のように各方言の細部においては区別するための変化を起こしている。この観点から、諸子音は母音との関係において方言ごとに詳細に観察する必要があるが、ここでは割愛する。

4. む す び

以上の考察から次の点が明らかとなった。

(1) o→u の推移が琉球方言全体で観察され、e→i の推移よりすすんでいる。

(2) これと平行して、o→u の推移に伴う子音への影響が琉球方言全体でみられ、e→i の推移に伴う子音への影響よりも広い。

この2点により、琉球方言の母音変化は、半広母音の狭母音化であり、後舌母音の o→u の推移から先に変化が起り、前舌母音の e→i の推移へと変化が深化していったであろうことが推察されるのである。そして奄美喜界島の中・南部の方言、奄美沖永良部島の国頭以外の方言、奄美と論島諸方言、沖縄諸方言、八重山鳩間方言、八重山西表島方言、与那国方言では、o→u、e→i の推移がほぼ完了して、典型的な3母音変化が行なわれたものとみることができよう。

以上、5母音から3母音に至る母音化の過程を中心に論述してきたが、問題も多いと思われる。5母音から出発しているのは、現在の共時態としての諸方言から明確に遡ることができるところから論をはじめた立場をとっているためである。すくなくとも琉球諸方言を観察していくと、かつては5母音の区別(音価については問題であるが)をもっていたであろうことが明確であるために5母音から出発しているのであるが、今後、甲・乙類別との関係が明確になり、これが母音とどう関係しているか等が明らかになれば、さらに5母音以上のものから出発することができると考えている。

文献時代が遅い琉球においては、共時態としての資料から、体系的に一步一步遡っていく方法が開拓されなければならない。理想としては、祖語から出発し、現在までの変遷を実態的資料と文献資料とを比較検討して明確に論述することにある。小論は、筆者にとって、これに至る中継地にしたいと考えている。

今後、さらに考察を深めるべきところや、問題点も多いと思われるが、大方のご批判を仰ぎたいと思う。

成稿には平山輝男先生をはじめ、大島一郎先生・徳川宗賢先生のご教示を賜わった。

(注1) 琉球方言の母音が a, i, u を基調とする方言(沖縄・与論・八重山鳩間など)と, a, i, i, u を基調とする方言(奄美・宮古・八重山の多くの方言)に分かれることはすでに知られている。これらの体系は、後述するように、方言ごとに変化事情を異にするが、「半広母音の狭母音化」という同一傾向によって生成されたと考えられる。また中舌母音をもつ諸方言では以下に述べるように、i が全般的に弱まって i に統合する傾向(奄美喜界島中・南部、八重山鳩間方言などでは統合している)がみられることを考慮に入れると、この変化全体を「3母音の方向への変化」として広義に捉えることができる。以下では「3母音化」を沖縄方言などのようにすでに3母音に統合している場合にも、こういう広義の場合にも用いることにする。

この「3母音化」は「半広母音の狭母音化」という点で中世英語から現代英語への「大母音推移」(The Great Vowel Shift) (Historical Linguistics-An Introduction, Winfred P. Lehmann. 松浪有教授訳『歴史言語学序説』 p. 132 以下)などと類似するものである。

(注2) 伊波普猷「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」『南島方言史攷』中
同「海東諸国記附載の古琉球語について」[国語と国文学] 8-3

(注3) 服部四郎『日本語の系統』 p. 58~63, 286~287, 301~307
同「日本語の琉球方言について」[文学] 36-1 p. 10~11
同「平山輝男著『琉球方言の総合的研究』」[国語学] 74 p. 84~85

甲・乙類別の語(「着」と「木」など)の一部が琉球方言で区別されていることを認めつつも、これが甲・乙類別の音韻構造とどのような関係にあるか疑問がないわけではない。たとえば、首里方言の [tʃi-](着)の口蓋化音は [ki:](木)と区別されるが、この区別が甲・乙類別の音価のちがいとどう結びつくのか疑問である。k→tʃ の変化は e→i の母音の変化の結果として起こった後代のもと考えられるからである(拙論「k音考」)。

また外間守善教授は「琉球方言に特徴的な口蓋化現象のおこった年代は、三母音化のおこった時代につながっている」(「沖縄の言語史」[文学] p. 22)としておられる。

なお、口蓋化現象については伊波普猷「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」に詳しい。

また、甲・乙類別のオ段に対応する類別についても、他の複雑な要素がからんでいるように考えられる。たとえば服部博士は「心」の例を「kōkōrō(乙) xohooro(名瀬方言)」(『日本語の系統』 p. 60)などのように比較しておられる。

琉球方言における「心」を意味する語は、「心」にあたる [kukuru] もあるが、「肝」にあたる [tʃimu] (沖縄奥武方言など)も用いられる。そこで「心」を意味する琉球方言として「心」と「肝」にあたるいずれの語が、より基層の語であったかが問題になる。「おもろさうし」(約12~17世紀)中の例をみると、「心」にあたる語は「ふなこころ」(船心・船をあやつる心づかい)の用例しかないのに対し、「肝」にあたる語は「きむたか」(肝高・品位の高い)、「きもちやさ」(肝痛さ・気の毒な)、「きまよい」(肝迷い・心が迷う)等々、圧倒的多数の用例がある(仲原善忠・外間守善「おもろさうし辞典・総索引」)。この事実から、おもろ時代には「肝」にあたる語が優勢であったと考えられる。以上のことから、「心」にあたる語は本土の影響で後代に定着したのではないか、との疑問がある。甲・乙類との比較には、一語一語について同様に諸事情を検討する必要がある。

また、現代共通語の o にあたるものが、奄美方言で o であるか u であるかは、地域差があり、語によっても事情が異なる(個人差もみられる)。甲・乙類別との比較では、先にこれらの実態の整理が要請される(本文 p. 6~7 表参照)。

さらに、先島方言と甲・乙類別との関係にふれたものに、崎山理氏の「琉球・宮古方言比較音韻論」(『国語学』59 p. 19)があるが、宮古方言と甲・乙類別の関係を検討した結果、例外が多いために、「このようなあまりに多い例外によって奈良朝時代にまで遡り得るかどうかが疑問である」として、「否定的結果しか得られなかった」としておられる。

また、南不二男氏の「日本語 hu, ho と八重山, 石垣方言 Fu, pu の対応」(『ことば』22, p. 23)では、八重山石垣方言の Fu, pu が現代日本語のオ段音に対応することから、これが上代日本語の甲・乙類別に相当する音韻と対応するものではないか、と問題を提起しておられる。注12参照。

(注4) 言語変化には内的要因と外的要因があるが、ここでは主に内的要因を考える。そして音韻内部だけではなく、アクセント・文法・語彙などとの体系的関係も考察する必要がある。1例として母音無声化とアクセントとの関係を論じたものに「崩れ行くアクセント」(平山輝男博士『日本の方言』講談社)がある。

(注5) 拙論「k音考」(『方言研究の問題点』平山博士還暦記念会 p. 91)

(注6) 注3に同じ。

(注7) おもろ時代にウ段・オ段が混乱していることについては仲原善忠・外間守善著『校本おもろさうし』p. 39 参照。

(注8) ここでは琉球方言がかつて5母音から3母音化の方向へ変化したとする立場から母音三角形では5母音を基本に示し、そこから出発している。これは服部博士のいわれる甲・乙の類別があったとする考え方と矛盾するものではない。すなわち、甲・乙類別(音価については諸説があるが)があったとする立場においても、甲類[o]の周辺に乙類[ö]の母音があったにちがいないが、さらに新しく融合母音[ɔ]が発生して[o]の周辺に音声上、差の少ない母音が集中する結果をもたらし、ついに、①[o](甲類) ②[ö](乙類) ③[ɔ](融合母音)が順を追って[u]の位置をめざして推移をはじめたと考えられる。これが3母音化の起こりであり、その後、沖縄方言では①②は[o][ö]>[u]のように変化統合し、③は[ɔ]>[o](長音)のように変化して、①②と区別を保っている。そして、奄美の甲・乙類別が実証された場合には、これらの方言では、①は[o]>[u]のように変化し、②③は[ö][ɔ]>[o]のように変化統合して、①とは区別を保っていることになる。このように説明することができる。エ段についても同様に説明できよう。

(注9) 拙論「k音考」(『方言研究の問題点』p. 124 以下)

(注10) 琉球方言の融合母音は後舌においても、前舌においても諸方言で観察される。仲宗根政善教授はこれをまとめ、後舌の融合母音[o:]は国語の-au -ao -ou -aku -ako -agu -ogu -awo -awu -uwa -owa -abu などと対応し、前舌の融合母音[e: é: ɜ:]は-ae -ai -ea -ia -ija -ake -aki -ase -oe -iwa -uwa などと対応する、としておられる(『琉球方言概説』『方言学講座』第4巻 p. 23)。これらの融合の初期のものを[ɔ][ɛ]で示す。なお、宮古方言の一部には[barau](笑う)[sau](竿)のような二重母音がある。これらはいったん[ɔ]になったが、融合母音として定着せず、auに還元したと考えられる。

(注11) 琉球方言の子音変化を概観するには、服部四郎「琉球語」と「国語」との音韻法則一(『日本語の系統』所収)、仲宗根政善「琉球方言概説」(『方言学講座』第4巻)など。

(注12) ハ行子音については、伊波普猷「p音考」(『古琉球』1943, p. 302 以下)、同「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」(『南島方言史攷』1934, p. 36)の分布図、南不二男「日本語 hu, ho と八重山, 石垣方言 Fu, pu の対応」(『ことば』22, 1960)など。

南氏は現代日本語の hu, ho に対応する八重山石垣方言の Fu, pu を観察され、さらに、現代日本語の ho に対応する八重山石垣方言の Fu があることに注目されて、これが上代日本語の甲・乙類相当の位置にある音韻と対応するものではないか、と述べておられる。提起された問題は大きいですが、注3、注8と同じく速断できない。たとえば、南氏のあげておられる [Fukuri] (埃) は、宮古方言などでは「埃」「ごみ」「ちり」を区別せず [gumi] という。これら意味分化のない表現が基層のものと考えられる。意味分化のとき [Fukuri] を移入した可能性がある。

(注13) このように o→u の推移のために [t, d, ts, s, z] のあとで母音が u→i→i の変化を経たと考えることによって、伊波普猷氏の「ウ列中、ツ・スの音節に限って、母音が u→ü→i (或は i) と変遷したとの仮定」(「海東諸国記附載の古琉球語について」〔国語と国文学〕8-3, p. 10) が真実性をもち、より充実される。

また、仲宗根政善教授の「ジ・ヂ、ズ・ヅの区別のある方言は未だ見出せない」(『方言学講座』第4巻 p. 30) や、服部四郎博士の「京都方言でさえ室町末期まで保存していた、そして現在でもなお土佐方言や九州の一部の方言では保たれている /zu/(ず) と /du/(づ) および /zi/(じ) と /di/(ぢ) の区別は、琉球方言でなくなっている」(『文学』p. 11~12) という記述のように、琉球方言では四つ仮名の区別がないが、この区別が急速に失われた要因は、o→u の推移がウ段に u→i→i の変化を起し、このためにより本質的なウ段・イ段母音がいっきに混同推移したためと考えられる。

琉球方言で四つ仮名の混同している実態については、次の文献など。

服部四郎「奄美群島の諸方言について」『日本語の系統』p. 287~288

服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢「奄美諸島の諸方言」『奄美—自然と文化』p. 404 以下。

上村孝二「奄美方言概観」〔国語学〕41, p. 7

柴田武「徳之島方言の音韻」〔国語学〕41, p. 27

仲宗根政善「琉球方言概説」『方言学講座』第4巻 p. 29~32

崎山理「琉球・多良間島、水納方言の音韻」『音声の研究』10, p. 296

(注14) 服部四郎「琉球語」と「国語」との音韻法則『日本語の系統』p. 306

服部博士は奄美方言の ki と宮古島と石垣町の方言の ki とのちがいを甲・乙類別との関係で説明され、[kii] が奄美では ki, 宮古・石垣では二重母音の i が強められて(音節主音)、ついに ki となったと説明することができるとされた。この場合、i と i のいづれがどのような条件で強められるかということが問題となる。

一方、沖縄諸方言は、現在中舌母音の i をもっていないが、かつては奄美方言と同類の母音体系から変化したとみられる。その根拠は次の通りである。

① 奄美方言の中舌母音が衰微していき、それを失ってしまうと沖縄方言の母音体系と同類になる。すなわち、喜界島・沖永良部島の方言でこの変化が顕著であり、与論島方言では沖縄方言とはほぼ完全に一致する同類の体系になっている。

② 母音体系以外の音韻体系が奄美諸方言と沖縄諸方言とは同類のものである。すなわち、無気喉頭化音(宮古・八重山方言にはない)のすがた、カ行子音・ハ行子音の変化様相相等が、先島方言とは異なり、奄美・沖縄両方言はほぼ共通している。これらの変化様相は母音体系の変化に応じてもたらされたとみられるから、この類似は母音体系の同一軌跡を考えることによって説明できる。

(注15) 注8、注10に同じ。

(注16) 「襟・壁」は沖縄方言では [tʃinnukubi] [jaːnukubi] (奥武方言) のようにともに [kubi] (首) という。[jeri] [kabe] は比較的に新しい語形であろう。

(注17) 『琉球方言の総合的研究』 p. 75

(注18) 加治工真市「鳩間方言の音韻体系について」〔琉球方言〕3

(注19) 注5に同じ。

(注20) サムエル・H・北村「宮古方言音韻論の一考察」〔国語学〕41, p. 94

崎山理「琉球・多良間島, 水納方言の音韻」〔音声の研究〕10, p. 287 以下
これら成節的鼻音を音韻論的に解釈し, 北村氏は /N/, 崎山氏は /M/ としておられる。

参 考 文 献

『南島方言史攷』伊波普猷, 楽浪書院, 1934

『探訪南島語彙稿』宮良当社, 1926

『南島方言資料』東条操編, 刀江書院, 1923

「琉球語」と「国語」との音韻法則, 奄美群島の諸方言について, 他『日本語の系統』服部四郎, 岩波書店, 1959

「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について——日本語の年代——〔言語研究〕26・27号, 服部四郎

「琉球方言概説」仲宗根政善, 『方言学講座』第4巻, 東京堂, 1961

『琉球与那国方言の研究』1964『琉球方言の総合的研究』1966『琉球先島方言の総合的研究』1967, 平山輝男・大島一郎・中本, 明治書院

『南島方言与論語彙』山田実, 武蔵野書院, 1967

「奄美諸島の諸方言」「奄美諸島諸方言の言語年代学的調査」〔奄美—自然と文化〕服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢, 日本学術振興会, 1959

「奄美方言概説」上村孝二, 〔国語学〕41, 1960

「徳之島方言の音韻」柴田武, 〔国語学〕41, 1960

「与論島と沖永良部の方言について」徳川宗賢, 〔人類科学〕X, 九学会, 1958

「奄美大島方言の一考察」上村幸雄, 〔人類科学〕IX, 九学会, 1957

「琉球語」金城朝永・服部四郎, 『世界言語概説』下巻, 研究社, 1955

『沖縄語辞典』国立国語研究所, 1963

『那覇方言概説』金城朝永, 三省堂, 1944

「日本語の琉球方言について」服部四郎, 〔文学〕36-1, 1968

「沖縄の言語史」外間守善, 〔文学〕36-1, 1968

『校本おもしろさうし』1965『おもしろさうし辞典・総索引』1966, 仲原善忠・外間守善編著

『おもしろ新釈』仲原善忠, 琉球文教図書, 1957

『八重山語彙』宮良当社, 東洋文庫, 1930

『宮古諸島学術調査研究報告』仲宗根政善・大城健・屋比久浩・成田義光・内間直仁, 琉大沖縄文化研究所, 1968

「琉球与那国島方言の音韻」柴田武, 〔ことばの研究〕国立国語研究所, 1959

「鳩間方言の音韻体系について」加治工真市, 〔琉球方言〕3, 琉大方言研究会, 1961

「K音考」中本, 『方言研究の問題点』平山輝男博士還暦記念会, 明治書院, 1970

——東京都立大学助手——